

皆さん こんにちは

今回は 『〇〇がん』が意味すること を題材にします。

例えば、 肺に がん があると言われたとします。
皆さんは多分 『肺がん』になったと考えます。
これは正しいこともあれば、間違いであることもあります。
そのことについて、今回は説明したいと思います。

肺にがんがあった場合、

肺そのものの細胞ががん化してがんになったものは、『原発性肺がん』といいます。
『肺がん』という場合、この原発性肺がんを指します。

一方、どこか別の臓器（肺以外）の細胞ががん化したものが、巡り巡って肺に定着したものは、『転移性肺がん』といいます。これは、普通に用いられる『肺がん』とは意味が異なります。

従って、肺にがんがあった場合に

- ① 『肺がん』であれば、肺がんの治療を行います。当たり前ですね。ですので、診療の上で参考にされる診療ガイドラインは、『肺がん診療ガイドライン』を用います。
- ② 転移性肺がん、であれば、元々の発生源である臓器により、用いる治療ガイドラインは異なります。『肺がん診療ガイドライン』は使いません。

少し説明を加えます。

例えば、肺に加え、大腸にもがんが見つかった場合、どう考えればよいでしょうか。
この場合、いくつかの可能性ががあります。

- ① 肺がんが大腸がんが1度に見つかった（2種類のがんにかかった）
- ② 肺がんが大腸に転移した。
- ③ 大腸がんが肺に転移した。
- ④ 他にももう一つ別のがんがあり、これが肺にも、大腸にも転移した。

この中から妥当なものを考えていくわけです。

①・④のケースのように、いくつも同時にがんにかかる方を、重複癌（ちょうふくがん、もしくはじゅうふくがん）といいます。そんなの多くないだろうといわれると思いますが、多くはないものの、一部の遺伝性がんの方や、喫煙者などでは実際、そのような場合があります。この場合は、肺には肺癌の治療を、大腸がんには大腸がんの治療を行うということになります。肺と大腸のどちらのがんの治療を優先するかは、それぞれの病気の進み具合等を加味して考えることになります。しかしながら、こうしたケースは多くありません。できるだけ、シンプルに合理的に説明可能か（1つのがんで全てが矛盾なく説明できるなら、可能性の少ないもの考えるのは不自然ですから）を検討して、②もしくは③で説明できないか考えます。

②と③のどちらの可能性が高いか考えます。

例えば、肺がんの進み具合がたいしたことがなくて、大腸の方が派手であれば、③と考えるのが妥当でしょう。その場合は、大腸がんになって、それが肺に転移したと判断し、治療は、大腸がんとして、肺の転移も含めて治療方針を建てていきます。手術可能なら、まず大腸にできたがんの切除がなされることが多いと思います。その上で、肺の部分を後日手術することもあるかもしれませんし、抗がん剤を用いた治療を提案されるかもしれません。この場合、用いられる抗がん剤の治療法は、肺がんの治療法でなく、大腸がんの治療法を用いることは、先ほどの説明で理解できたのではないかと思います。

では、今回はこれで。

また、次回。

